

遠山顕先生に聞く

教科書を10倍楽しむ法



遠山 顕

(構成・編集部)

●大修館の教科書の印象

英語 I, Oral Communication Iなどを拝見しましたが、生徒のニーズや興味をよくとらえていますね。たとえば *Genius I* のジョージ・ルーカスの話題などそうですね。時事的で、情報を処理する練習があり、さらに生徒が情報を提示・プレゼンするといった流れは新しいところではないでしょうか。

●ご自身の学ばれた教科書で、印象に残るもの

残念ながら断片的な印象しかありません。時事的内容が少しでもあれば覚えていたかもしれませんが……。英語劇をやっていた関係で、シェイクスピアなどはよく覚えました。

それに対して、印象の強いのが文法のテキスト。なにか「科学」がありそうな雰囲気がありました。SVOの意味はその時はよくわかりませんでした。いずれ血となり肉となるのではないかと思いつつ、講義を聞いていた覚えがあります。先生が黒板に書いた「Sが主語でVが動詞でOが……」というのを、頭のなかで I love you. と書いていました。それは知っている数少ない英語で、自分には心躍るセンテンスだったのです。

自分で英文をノートに書き写して、日本語訳も書くと、英語の語順とはこういうものだとかわかってくる。それを口に出して言ううち、構造が見えてきて、面白かったのでしょうか。それがわかって、だから？という人と、面白いという人と分かれていますが、後者だったのでしょう。「面白い」ということがバネになる人は多い。やはり結局は

fun が進歩に貢献すると思いますね。

文法の授業も、そのような、なにか「発見」をもたらす教え方というのを目指したいと思っています。文の構造をある程度つかむと、特に SVO ですが、それが頼れるナビゲーターになってくれます。それが英文のラッシュ時にも道案内してくれると思うのです。人生も同じで、ちょっとしたルール、大つかみの考え方を教わって、後は自分で動いていくものですよね。

一方で今は、ルールは破るものだとか教えることも必要かもしれない。ルールに忠実に従っていけば実入りがある、といった風潮を感じますが、実際はルールを越えた努力が実を結ぶことが多い。ルールを知ることと、それを越えて新しい世界に立つ自分を感じることは両方とも貴重です。知って越えればいいのですが、越えてはいけないと閉じ込めるのは十分でないと思います。

●教科書で英語を act out する

これまで教えてきて教科書との関わり方の基本に考えているのは、「英語は act out することだ」ということです。英語は身体に入れて動かすもの、あるいは動かされるものだと思っているので、テキストを使う場合もできるだけ教わる側の学生が「動く」ことを考えています。「動く」にもいろいろな意味があります。心が動く＝感動することから、実際に場面などを演じて身体を動かすことまで含めています。

たとえば読む授業で、学生にあるパラグラフを教師として教えさせます。15分間、1人で授業を

やらせる。そうすると、その人がどんなふうに関わってきたかわかる。僕自身にも発見があり、アドバイスもできる。

スキットまたは短い劇を用いたり作らせて act out させることもやります。何かのテキストを読んだ後、それを元に、グループでドキュメンタリービデオを作らせたりもしました。役割分担し、学生が役を演じ、インタビュアーが取材します。手持ちの資料を中心に作ってもらう。そのなかでは、会話のやりとりを呼吸なども含めて立体的に教えることも可能です。

基本として、テキストの文章を速く読み上げる訓練なども取り入れました。強調や弱化の原理や方法を教えます。今のままでは遅いからです。教科書の1ページなり2ページなりを速く読ませます。それには現在使っている教科書を読むのが一番いいのです。5回続けて声に出して読んで、誰が一番早く読み終わるか競争させたりしました。

●「リーダーズ・ハイ」の経験を

ジョギングなどをされている方はわかると思いますが、走り始めて最初は苦しくてもしばらく走っていると気分が高揚してくるんですね。僕は読むこともこれと同じだと思います。ランナーズ・ハイにならって、「リーダーズ・ハイ」と呼んでいます。今の学生たちにはある種のハイになることの経験が欠けているのではないのでしょうか。他のスポーツや勉強にも絶対にハイがあるはずで、それは上手い下手と関係ないと思います。たとえばショウジョウバエの実験をしていて、なかなか理論通りにいかないけれど続けているうちに、ある時点で数えること自体に喜びを感じるような、なにか違う次元に行ってしまうというようなことですね。発明王エジソンの電球作りの話では、適切なフィラメントを得るのに5千〜6千種類もの素材を次々と試していったそうですが、これも一種のハイがあったのでしょうか。

こんなふうに関わるところまでいかせる、



それを経験させる。僕の場合は高校時代、2時間、3時間と音読を続けて、気づいたら明け方まで読み続けていたこともありました。それによって、その時に抱えていた問題から逃避したり、忘れることができたんでしょうね。ケネディ大統領の就任演説を暗記して、音程までまねをして、「ケネディみたいに聞こえる！」と思ってしまったり。とにかく、なんらかのハイを一度でも経験させたいと思い、それをクラスでもよくやらせていました。

●音読してつく^{とつとつ}力

母語が訥々とした人も、外国語は速度が落ちるので、口の練習はしたほうがいいと思います。一息で言うことには、意味のチャンクがあり、それがある程度まとまった形で出るとは外国語でも大事です。意味を自分でつかんでいても、話す時にあまりにも口が動かないと、相手はわかってくれないかもしれない。

音読するのは発音のためでもあります。意味を感じながら音読していくことが、その人の総合的な力をつけていくような気がします。ある程度 reduction などをわかっていた方がしゃべりやすいし、リスニングの際にも大変役立つ。

さらに、成果を人前で言う、というのも意味があります。たとえば早口言葉を教えたあと、1学期内に必ず発表させますが、クラスではやりません。僕を廊下で呼び止めてもらい、その場で言ってもらおうようにします。廊下ですから学生はすぐ

いプレッシャーを感じます。人前で、というのは授業中以外にもいろいろな形があるはずですが。こうしたやり方は地味ではありますが、力をつけるには近道だと思いますね。

●高校生レベルで培ってほしい英語力

当然ですが、英語力は発音・文法・語彙の力を増やさなくてはつかないものです。発音の力とは完璧な発音をするためではなくて、英語が話しやすくなるためのものです。また、ブローケンでいいという人もいますが、できるだけきちんとした文法で話した方が将来いいと思うんです。ブローケンでもしっかり仕事ができるという人は、人格や経験にバックアップされている部分が多く、これらが実は一番重要な要素かもしれません。

あとは、何でも食べられる、自分のミスを受け入れる、質問がちゃんとできる、この3つは身につけてもらいたいですね。異文化に入ったときの重要要素はこれだと思います。結局、食わず嫌いはだめ、自分のミスは他人に笑われる前にまず自分で笑えなければだめ。質問の仕方がわからないと困るでしょうから、どうしてもわからない人はWhy? だけでも知っていればいい。

英語に限らず、学校でなにかを教えることは、究極的には人生の問題解決能力を教えることだと思います。それにはロジックやリーズンなどの能力だけでは十分でなく、メタファーやアンビグエィティーなど、理屈だけで解決・理解できないものへの対応も示唆すべきではないでしょうか。発想転換力を英語で、ということとちと大げさですが。

たとえば今は、オヤジギャグといわれてしまうだけじゃれですが、the lowest form of humor と呼ばれる一方で、最低限必要なユーモアです。言葉の力の根源であり、発想転換力のベースです。言葉遊びを土台の一部に取り入れられない言語文化というものはないと思います。一歩進んだ rhyme (韻) などは、洋楽、詩、広告など、「実用」への目を開くものです。そうしたものを教えずに、情

報のやりとりだけになってしまうのはどうなんでしょう。高校生にはリニアに順を追う思考法だけでなく、目標を見定めて入口を探すような発想法も望ましいと思います。

コミュニケーションという面では、双方向だけでなく、一方通行のコミュニケーションもできる力をつけて欲しいですね。たとえば、人生のエピソードを物語る、伝えるといった際に必要な、1人で聞かせる、演じる力、つまり独演力です。歌を歌ったりする時の表現で、carry a tune という言い方がありますが、自分の話を最後まで carry してやり通す力というのを付けてもらいたいと思います。日本は高校でも1歳違いと先輩で、「です・ます」をつけるなど言葉遣いも変わってしまう文化ですが、英語にはそれほどの区別はなく、もっと水平なやりとりが身上とも言えます。その語りやすさに気づいてほしいです。

●「理想のテキスト」とは？

テキストブックというより、テキストボックスのようなものがあつたらいいと思います。本だけでなくMDや録音装置などもついていて、たとえば手本になる演説などを好みの音程やスピードに合わせて再生できるような。もちろん歌も。それに『2001年宇宙の旅』に出てくる人工知能、HALのようなソフトが入っていて、学習のガイドとして交信してくれるといいですね。英会話の教室などでは、学習者が自分の殻から出たときに急に上達するのをよく目の当たりにしますが、そんな「殻破り」の手助けをしてくれる存在が搭載されていれば……。持ち歩いても格好がよく、いつでも練習ができる、リスニングができる、歌も歌える、NHK『英会話入門』も聞くことができる(笑)。この4月から開始するラジオ講座『英会話入門』(NHKラジオ第2放送、月～土)でもコミュニケーションの楽しさや話し・聞く技術を15分間体験してもらえればと思っています。

(とおやま けん・コミュニケーション代表)